

子宮頸がん(HPV)ワクチンについて

(<https://www.know-vpd.jp/vpdlist/hpv.htm>)

2021.6 みどり小児科医院

<HPV(ヒトパピローマウイルス)とは>

ヒトパピローマウイルス(HPV)は、主に性交渉によって生殖器やその周辺の粘膜にイボをつくるウイルスです。子宮頸部に感染すると子宮頸がんに行進することがあり、中咽頭がん、肛門がん、膣がん、外陰がん、陰茎がんなどの発症にも関連します。また、HPVは若い人ほど感染しやすいことがわかっています。子宮頸がんの原因になるHPVは、性行為だけでなく皮膚の接触によるものを含めて女性の約80%は知らない間にかかっています。子宮頸がんは20代前半の発症者もおり、30代までの若い患者が多いのが現実です。がん検診での発見が遅れ、妊娠中の検査で子宮頸がんが見つかった場合には、妊娠の継続・出産を諦めて子宮を摘出しなければならないこともあります。子宮頸がんは1年間に約11,000人の女性が発症し、毎年約2,800人が亡くなる、ワクチンで防げる病気です。17歳未満でHPVワクチンを接種すると子宮頸がんの88%を防ぐことが報告されています。

<予防法>

HPVワクチンで予防します。HPVワクチンは、2価「サーバリックス」(定期接種)、「4価ガーダシル」(定期接種)、9価「シルガード9」(任意接種)の3種類があります。HPVワクチン接種によりサーバリックスとガーダシルでは約70%、シルガード9では約90%の子宮頸がんを予防できます。いずれのワクチンも初めての性行為の前に接種を始めることが望ましく、半年間で3回、筋肉注射で接種します。定期接種の対象年齢は小学6年生～高校1年生相当の女子です。標準的な接種年齢は中学校1年生です。どのワクチンも、効果は20年くらい続くとされています。接種の推奨年齢以上の女性も任意接種で受けることができます。また、男子も2020年12月からガーダシルであれば、任意接種で受けられるようになりました。

<HPVワクチンの効果について>

日本より7～8年前からワクチン接種をはじめた欧米やオーストラリアでワクチンの有効性が報告されています。2020年には、スウェーデンの大規模調査によって、HPVワクチンの子宮頸がんの減少効果が報告されました。これによると、がんになるリスクは、10～16歳のワクチン接種で8分の1以下、17～30歳のワクチン接種で半分以下に低下しました。

<ワクチンの種類について>

定期接種はガーダシル(4価ワクチン)をお勧めします。自費はガーダシルもしくはシルガード9(9価ワクチン)をお勧めしますが、シルガード9は要登録・要相談になります。

価数 ワクチン名	定期接種(対象) または任意接種	予防する VPD	対象
2 価 サーバリックス	定期接種(小学校 6 年～ 高校 1 年の女子) 任意接種	70%の子宮頸がん(16、18 型)	9 歳以上の 女子
4 価 ガーダシル	定期接種(小学校 6 年～ 高校 1 年の女子) 任意接種	70%の子宮頸がん(16、18 型)、肛門が ん、尖圭コンジローマ(6、11 型)	9 歳以上の 男女
9 価 シルガード 9 (全例要登録)	任意接種	90%の子宮頸がん(16、18、31、33、45、 52、58 型)、尖圭コンジローマ(6 型、11 型)	9 歳以上の 女子

* 自費の値段(2021.10):薬価や消費税の上昇等で変わることがあります

4 価ガーダシル(計 3 回接種) 1 回 18000 円、9 価シルガード(計 3 回接種、要登録) 1 回 28000 円

<接種の積極的な勧奨の一時中止について、接種を勧める小児科学会の見解>

厚生労働省は 2013 年 6 月に接種後の有害事象として見られた慢性疼痛などの症状と接種との因果関係等について調査が必要なため、接種の積極的な勧奨の一時中止という決定をしました。その後、接種後に生じた診療・相談体制の確立、健康被害を受けた接種者に対する救済などの対策が取られました。最近の国の調査研究により、HPV ワクチン接種後に現れた症状の多くが、ワクチン固有のものではないこと、国外からもワクチンの有効性と安全性に対するデータが蓄積されていること、HPV ワクチンを積極的接種されている国に比べて、日本国内の若い女性の子宮頸がんが明らかに増えていることがわかってきました。以上のことから HPV ワクチンによって守られるはずの多くの若い女性たちの命と健康を守るため、小児科学会としては接種を勧めていく方針となりました。

<副作用>

副作用として受けたところの痛み、局所反応があります。接種時の痛みはほかのワクチンと大きく変わらないとされますが、筋肉に注射するために数日間にわたり筋肉痛がおこることはほかのワクチンとの違いです。また、このワクチンの接種後に慢性疼痛などがおこることがあります。この痛みの症状は、外傷やワクチン接種などをきっかけとして、接種直後から数日後に痛みの症状が出るものです。今回の HPV ワクチン接種後の慢性疼痛は、ワクチンの成分(薬液)によるのではなく、注射をする行為によるものだと考えられています。症状としては、接種部位以外の部分に通常では説明できない過敏な痛みが持続し、左右の腕の太さや温度の違い、むくみや発汗がみられるなどの異常がみられます。子どもの場合は、ある程度の時間はかかりますが多くは回復しています。慢性疼痛等の副反応が出た場合は受診してください。